

## 大慈悲の領解

### 廻向と領解

前において大体、久遠の仏心大慈悲は、衆生の上にかに廻向表現せられるのであるかを頂いてきた。しかるに大慈悲の廻向表現であるところの、真実の教行信証も、それが、単なる文字であったり、觀念であり、論理である間は、われらの真実具体的な宗敎生活とならない。ここに衆生の領解の問題がある。大慈悲はこれを領解することによつてはじめて衆生の靈性的自覺の本質となる。衆生の領解によりて大慈悲は廻向を全うするのである。すなわち廻向の哲学論理を知的に知つたというのみでは、なまなましい大悲廻向の宗敎は成り立たない。真実の教行信証が、情意の上に生きて、全我の具体的事実となつて衆生は宗敎的に救われたのであり、これを領解という。

衆生の領解が真実に成立して、はじめて如来の廻向は廻向となつたのである。しかしこの経敎をいかに領解するかの問題は、実に歴史的な大問題であつた。すなわち、浄土の三部経から、印度の竜樹菩薩の十住論、天親の浄土論が生まれ、支那において曇鸞の論註、道綽の安樂集、善導の觀經四帖疏が作られ、日本に來たつて源信の往生要集、法然の選択集となり、ついにわが親鸞聖人の教行信証が生まれ、さらに今日われらがこれを頂く真宗学まで、この三国七祖の歴史的展開は、世尊の敎法の領解の展開であつた。

七高僧は、その時代と所と機とを代表して敎法を伝承し、その領解を通して本願の真意を開顕しつつ、これを次に相承して歴史的使命を發揮する人を待ち、ここに連綿一貫の名号の歴史は綴られたのである。敎法は領解せられなければならない。しかしして領解されたるその信の告白は、敎法の真意として敎法とともに相承せられて、敎法の真意を發揮しつつ、時と機との上に明らかにされてゆく。つまり敎法は領解せられ、領解は歴史的に展開されて、この領解と展開とを通して敎法は歴史的に人を救つてゆく。しかもそれがそのまま大悲廻向なのである。

われらは親鸞聖人のみ言を聞くことができなかつたならば、とうてい本願の真意を知ることはできなかつたであろう。いかに三部経ありとも、七高僧はましませども、聖人の領解、それより出ずるみ敎えを聞くことができなかつたならば、全く常識的な定散二善の自力の世界を、定散自力とも知ることができなかつたであろう。誠に、敎法の相承は、必ず領解の展開と一体である。自信敎入信とは誠にこのことである。敎法によつて、領解の信心は生まれるのではあるが、また鮮やかなる領解の心によりて、敎法は敎法として生きるのである。

伝承の高僧先哲たちは、敎法から生まれたのである。しかしその時代を荷負して敎法を真に領解せられたる、その信心の智慧によつて敎法は曇りなき相を顕わすのである。我らは如来大悲本願の廻向表現たる真実の教行信証を、真に領解しなければならぬ。それには世尊の敎法の真意を七高僧、聖人、先哲の領解の歴史的展開に聞かなければならない。

真実の教法を拒む者は、大慈悲を拒む者である。これを「大慈悲の領解」と題を改めて述べることにする。なお、大經の唯除五逆誹謗正法の文も、これを、この領解の部において頂くことにする。

#### 本願領解の基調

如来久遠の大慈悲は衆生の業苦を受け取るが故に、法蔵菩薩となる。しかるに法蔵菩薩は四十八願であるがゆえに、大慈悲は四十八願である。四十八願も詮ずる所、第十八願である。ゆえに大慈悲とは十八願至心信樂の願であり、大慈悲の領解とは、十八願の領解である。今「大慈悲の領解」なる標題も、具体的には十八願の領解ということである。

天親論主は願生偈の最初において、

「世尊、我は一心に尽十方無碍光如来に帰命し、安樂国に生まれんと願いたてまつる。」

と、その領解を教主世尊に向かつて表白せられた。この世尊我一心帰命のみ言を頂いて、聖人は信巻別序において、浄土論を、「特に一心の華文を開き」とたたえられた。なぜならば、この論主の一心こそ、本願の三信の領解の基調となつたからである。後に詳述するであろうところの信巻の中心問題は実に、いわゆる、三一問答、三心一心の相関関係にあるからである。

#### 十八願の願体と願名

十八願には、至心信樂欲生我国と乃至十念と、初めが信、後が行、信と行と二つの願事があるが、いずれを願体とすべきであろうか。いわく、三信が願体である。どうしてそれがわかるかといえ、聖人信巻に、至心信樂の願と標していられるからである。しかし人有つていうであろう。それなら何ゆえに、念仏往生の願といわれるか。念仏往生の願といわれる以上、十念願体ということができようであろう。この問題については、知っておかねばならぬことがある。

まず第一に、支那の淨影、嘉祥、天台等の諸師は、皆十八願を十念願体と見て、十念往生の願という。今の念仏往生の願は、諸師の十念往生の願とは、全く違つた意で特にこれと簡えらぶつもりで念仏往生といわれるのである。十八願には願名が五名ある中、念仏往生之願、選択本願の二名は、元祖法然上人の立名であり、本願三心之願、至心信樂之願、往相信心之願の三名は、聖人御己証の立名である。

念仏往生の願とは、善導法然を貫く、宗義を表顯された願名で、先にいう諸師の十念往生の願という願名に簡ぶのである。

選択本願とは、法然上人一代の興業、選択本願念仏と廃立の原理を示された願名であつて、本願三心の願、往相信心の願名は、選択集の三心章によつて信心正因を顯わす願名、至心信樂之願は巻頭に標挙せられて信巻全体を統べるところの本願三信、十九願二十願の三心を簡ぶところの本願真実の三心をあらわす願名、今、十八願の願体を示したまうところの願名である。

しかるに善導は道綽をうけて、十八願文を釈するに、「若シ我仏ト成ランニ 十方衆生 我ガ名号ヲ称へ 下十声ニ至ルマデ 若シ生レズバ 正覺ヲ取ラズ」(もしわれ仏とならんに十方の衆生、わが名号をとまえ、下十声に至るまでもし生まれずば正覺を取らじ。)といい、三信の相をば出さずして、称名について十八願を釈したまうた。それでもなお三信を願体ということができるのであるか。この問題いかにいうことであるが、まず善導大師は、觀經に立つて大經を釈願せられるのである。觀經という經は、聖道門より浄土門へ衆生を誘引転入せしめる使命を持つ經であつて、行をもつて表とし、八万四千の諸善万行を顕説し、流通分に念仏行を出して、衆生をして諸行を捨て、念仏行に入らしめんとするのである。

かく行行相對の立場に立つて、大經弘願の法門を顕されるのであるから、至心信樂の三信を称名行に撰め包んで、称我名号下至十声と、称名の行について釈したまうのである。かくせられることが真宗の歴史的展開の使命であつたのである。すなわち易行易修の浄土門はこれによつて顕れたのである。

諸師は盛んに觀經を講じたけれども、十念を称名行とせずして、念を觀念とすがゆえに、自性唯心に沈んで、聖道門に逆転し、あわれ仏の正意もかくれて、末法濁世の下品を救うこと能わざるに至つたので、善導大師は古今を楷定して、易行易修の念仏行であることを明らかにして、觀經下々品の「至心に声をして絶えざらしめ、十念を具足して南無阿弥陀仏と称せん。」とは、大經の乃至十念の称名行であることを釈釈せられたのである。

行々相對して、聖道の難行に對して、浄土の易行の称名行を示されるけれども、この行は必ず、信とともにある念仏行であることを示すのが、本願の三信十念である。行は必ず信をはらむし、信は必ず行を具すのである。いわゆる、眞信心必具名号である。だから今の念仏往生の願の念仏とは、信心具足の念仏であつて、聖人の信心正因称名報恩の念仏である。もし念仏するとも三信なくば如実の念仏ではない。十七願成就の名号を聞信する一念に三信を成じ、称うれば、すでに報恩謝徳となつてゐるのである。誠に信こそ往生の正因であるがゆえにこの三信を願体とするのが十八願である。

### 本願の三信

信卷の中心問題はいわゆる三一問答にある。以下三一問答について頂くことにする。

「問う。如来の本願すでに至心、信樂、欲生の誓いを発したまへり。何をもつてのゆえに論主一心と言ふや。」

前において十八願の願体は三信であることを決定した。至心信樂欲生の三信は十八願の体であり生命である。一代藏經は三部經に、三部經は大經に、大經は四十八願に、四十八願は十八願に、十八願は三信にと、ひきしぼつて頂く時、本願三心の領解の問題は誠に一大事因縁である。人生死活の一大事である。本願の領解とは実に三信の領解である。本願の領解は大慈悲の領解である。大慈悲とは具体的には本願のことである。

大慈悲自身の自己形成が本願であり、やがて三信である。そうしてかくの如き本願の形成は、一切衆生無辺の極濁悪を受け取りたまうがゆえである。

「問う。如来すでに至心信樂欲生の誓いを発したまえり。」まず問いを出される。如来は本願文に「至心に信樂してわが国に生まれんと欲え」と如來自身の本願を表現し、「もし生まれずば正覺を取らじ」と誓われた。

思うにこの王本願の三信こそは、如来久遠の真証をそのままに、現実の衆生に照応して、自然に顕現するところの必然の、したがって唯一絶対の仏心の表現形式でなければならぬ。これよりほかありえない大悲仏心の自己形成、これによりてのみ、いかなる極悪の衆生といえども助かるがゆえに、如来は正覺を成ずることを得、南無阿彌陀仏の正覺を得たまうが故に、衆生は名号を信受して助けられる。であるからこの三信によつてのみ往生即正覺、正覺即往生の原理、上求菩提下化衆生の仏道の原理、自利即利他、利他即自利の原理が具体化するのである。

### 論主の一心

「何をもつてのゆえに論主一心というや。」

これがすなわち信巻別序の「特に一心の華文を開き、且く疑問を至してついに明證をいだし」といわれたのがこのことである。何ゆえに、如来は三信の願をおこしたまうたのに、天親論主は「世尊我一心帰命尽十方無碍光如来」と告白せられたのであるかと問い、やがて、三心即一心の明証を出さんとせられるのである。

思うに、本願の三信はすでに述べたように、如来大悲誓願の、これより外に途なき必然の表現である。その表現がやがて行者のために廻向となるためには、衆生は、大悲本願を領解しなければならぬ。衆生の機の上に領解せられてはじめて救済の事実となるのである。今の論主の一心は、論主の領解の告白である。

然れば何ゆえに三信は一心であるのか、本願の三信は機を受けて一心となるのである。それは妥当なことであるか。論主の真意はいずれにあるのであるかを問われる。

「答う。愚鈍の衆生をして解了し易からしめんがために、弥陀如来三心をおこしたまうといえども、涅槃の真因はただ信心をもつてす。このゆえに論主三を合して一とせるか。」

この略釈の文を頂くについて、古来一因故なりや、二因故なりやと、問題となるところである。すなわち、

(一) 愚鈍の衆生をして解了し易からしめんがために、

(二) 涅槃の真因はただ信心をもつてす。

と文の上を見ると二つの因故があるがごとくである。ところが略文類を見るというと、「答う。愚鈍の衆生、覺知し易からしめんがためのゆえに。」と一因故となっている。

まず二因故説では、「愚鈍の衆生をして解了し易からしめんがため」とは「契機」すなわち衆生の機にかなうことである。愚鈍の衆生とは、觀經下々品の悪機、一生造悪の衆生、臨終に当たつて大苦惱の中に善知識に遇い、たちまちの間に信決定し

て火車を弘誓船にかえるという間髪を入れぬ危急の時、至心信樂欲生の三信では間に合わぬ、ただ一心に念仏申せ、たすけられる、聞いて信決定する、かくのごとき愚人をして、領解をもやすくするために、契機の本願だと示されるのである。

次に「涅槃の真因はただ信心をもつてす」とは「契法」の説、法に向かつていう時は、涅槃の真因はただ信心だけでよい。このことはすでに法然上人が「涅槃の城みやこには信をもつて能人となす」と決しられている。今それを出された。真因唯信心の化風こそ聖人の宗教の眼目である。真因とは普通は因縁という。因があつてそれに縁がはたらいて果を生ずる。ところが、今の涅槃の果に対する真因は、信心一つが因となつて何ものの援助をからずして涅槃の証果に至る。もともと弥陀の大涅槃の真証より来たる信心であるがゆえに、自然に涅槃に入り涅槃に還る。ゆえに真因とこののである。今、論主の一心は、上は法に契い、下は衆生の機に契称う、すなわち普徧妥当の説であるというのである。

一因故説では、略書の説「愚鈍の衆生をして領解するに容易ならしめんがためのゆえに」の一因故である。すなわち「如来三心を発したまうといえども、涅槃の……」とあり、如来は本願の三信を發せられたけれど、三心は一を開いた三であつて、三のところそのままという、即一の理は離れない。仏願はもと衆生のためには外ならない、衆生のために涅槃の真因は信心一つと定めたまうたのである。これが一因故の説である。

この説では、真因唯信心と定めたまうたことが、愚鈍の衆生のためであるというのである。この二説いずれも悪いことはないが、今この文は「弥陀如来三心を發したまうといえども、愚鈍の衆生をして解了し易からしめんがために、涅槃の真因はただ信心をもつてす。」と頂くことができる。島地聖典の如く「ためなり」と訓むから二つに見えるが、「ために」と読めば、文章を前後しなくても、一因故であることがよくわかる。

「發したまうといえども」、如来が三心を發されたのは、それはそれでわけがある。それは実に衆生の上に、金剛の大信心を成就せんがためである。衆生のためにしたまうは大悲、涅槃の真因たる信心は智慧、悲智一如なる本願に相應して、論主は一心と仰せられたのである。真因は唯信心ということが愚鈍の衆生のためであるということである。

### 三心の字訓釈

如来は至心信樂欲生の三心の誓いを發され、天親論主は一心と領解せられた。何ゆえに一心といわれたか、それは愚鈍の衆生をして領解し易からしめんがために、涅槃の真因の信心一つと定められたからである。このゆえに論主は、合三為一（三を合して一と為せる）かというのが前述の大体である。

次に広釈せられる。広釈中に二ハ字訓釈、二ニハ実義訳の二門がある。いずれも三心即一心ということを顕わされるのであるが、初めの字訓釈は合三為一門、次の実義訳は開一為三門となつている。

先標。「私に三心の字訓を窺うかがうに、三は即ち一なるべし。」

「私に」とは、これより自解を述べたまうがゆえに私にといわれる。私は公に對することば、しかし自解といつても字訓についてはよりどころがあつて出されるのである。字訓というは、訓とは大体は「おしえ」ということ、文字がもつ義をもつて人を教え導くので訓であるが、今は文字の持つ義を訓というのである。今、字訓からうかがうに、三心はすなわち一心であるとまず標して、次に、正積せられる。一、出訓、「その心いかなとなれば」とて次のごとく訓を出される。

至心 至は 真なり 実なり 誠なり

心は 種なり 実なり

信樂 信は 真なり 実なり 誠なり 満なり 極なり 成なり 用なり

重なり 審なり 驗なり 宣なり 忠なり

樂は 欲なり 願なり 愛なり 悦なり 歡なり 喜なり 賀なり

慶なり

欲生 欲は 願なり 樂なり 覺なり 知なり

生は 成なり 作なり 為なり 興なり

以上のごとく、至心について五、信樂について二十、欲生について八、合計三十三訓を出しておられる。一一の訓には皆よりどころがあつて出されたのであるが、中には明らかでないものもある。そこで、六要鈔にも「字訓いまだことごとく本文を勘得せず、博覧宏才仰ぐべし信ずべし。」といつてある。今は一一の訓についてその本を明らかにすることは略することにして、次に三十三訓を本にして出される会訓えいこんについて義を述べることにする。

## 会訓

「明かに知んぬ」と書きはじめて次に三十三訓を本として八個の会訓を出される。すなわち

至心 真実誠種之心

信樂 真実誠満之心 極成用重之心 審驗宣忠之心 欲願愛悦之心

歡喜賀慶之心

欲生 願樂覺知之心 成作為興之心

と八重の会訓を出して、三心の一一に、「かるがゆえに疑蓋雜ることなし」と結び、特に欲生心には、「大悲廻向の心なるが故に、疑蓋雜ることなし。」と出されてある。先ず至心について、真実誠種之心といわれる。先の字訓に、至とは、真なり、実なり、誠なり。心とはこれ種なり、実なりとあつた。至の字は真実誠というは、善導の至誠心積にあることでわかり易いが、心を種というのは、これも善導の玄義分に、「およそ種と言うは、すなわちこれその心なり。」とあつて、心は種である。種は実である。これをもつて一句として、至心を真実誠種の心といわれる。種とは因種で、真実誠が因種となつて成仏する。真実誠でなければ仏果の因種にはならない。浄土論に「二乗種不生」で、浄土には二乗の心では生まれられない。また、浄土には二乗の種は発生しない。どちらにしても、弥陀の浄土には至心の真実誠の心でないとの関係がない。生まれもしないしまた発生もしない。真実よりほかに衆生の助

かる心はない。しかし、衆生には真実はない。下に涅槃経を引いて、「真実というはすなわちこれ如来なり。如来はすなわちこれ真実なり。」とある。真実即如来、如来即真実、これよりほかに真実はない。この如来の真実誠が衆生の機に徹到して衆生の信心すなわち真実誠となる。これが因種となつて衆生が仏になる。真実誠は、成仏の因種である。そこで今、至心を真実誠種の心といわれる。

次に信樂について第一に、真実誠満之心なりといわれる。満とは信の字の転訓で、充満とつづる字で、もののみち渡つて欠ぐところのないこと、信の字は真実誠がゆき渡り満ち満ちて欠ぐることがないこと、至心すなわち真実誠種の心が、ここにきたつて誠満の心となつたのである。仏果の因種たる真実誠が衆生の心中へ、仏智満入、真心徹到と入り満ちたのが信樂であるといわれるのである。だから信樂は満足した心である。腹のふくれた相である。「仏の本願力を観ずるに、遇うて空しく過ぐる者なし。能く速やかに功德大宝海を満足せしむ。」と浄土論に説かれるものもこの誠満のことである。真実は、とどけば人の心を満たす。如来大悲真実は、衆生の心中に至り満ちて真実信心となる。

ゆえに、『唯信鈔文意』の初めにも、

「信はうたがう心なきなり、即ちこれ真実の信心なり。虚仮はなれたる心なり。虚はむなしという、仮はかりなりという。虚は実ならぬをいう。仮は真ならぬをいうなり。」

と、真実と虚仮と相對せしめてある。虚仮とは、かりにあるもの、むなしのもの、すなわち相對有限のもののこと。「空しい」のであるから、からである。満の反對である。だから生死するものを追い求めても満足はない。相對有限諸行無常なるものをどれだけ貪つても満足はない。真実の満足は、大信心にある。無量寿、無量光の南無阿弥陀仏を受領してのみ、真実誠満と満たされるのである。これが土台に成就しなければ真宗は成立しないのである。

### 極成用重

信樂について第二義に、「極成用重之心」といわれる。極とは至極、成とは成就、つまり極成とは至極成就ということ。用とはこれに二訓あつて、「はたらき」とする場合と、「もちいる」と訓ずる場合とある。そこでこの用重にも二種の解釈がなされてきた。

すなわち「もちいる」ととれば、用重とは、信用尊重ということである。弥陀の本願名号は、真実誠であつて極成されたものであるから、最も信用尊重さるべきものである。この本願を信用尊重する心すなわち信樂無疑の心である。

また一義には、用は「はたらき」である。至極成就されたものには大用がある。すなわち衆生済度のはたらきがある。その場合、重は「かさなる」と「おもし」と二訓あるが、「かさなる」といえば、一重二重とかかさなるということ、尊貴の義である。「おもし」といえば、尊重とか深重とかいうことである。そこで用重とは、大用深重ということになる。すなわち本願はその体極成されたもの故その力用深重、信心一つでもつて、大涅槃の仏果に至る。下に涅槃経を引かれるが、その中に「菩

提の因また無量なりといえども、もし信心を説かばすなわちすでに撰尽しぬ。」とある。これ大信心の力用深重を示されたものである。

以上、信用尊重の義と、力用深重の義と二義あるけれども、しかし結局は一つである。力用深重なればこそ、信用尊重されるのである。至極成就されたる本願の信樂は、信用尊重さるべきものを信用尊重する心である。力用深重、極悪の衆生を仏果に至らしむるからである。

### 審験宣忠

次に信樂とは「審験宣忠之心」と言われる。審とは、ものが分明、すなわちあきらかになつたこと、熟語を造れば、審諦で、ものの道理が明らかになつたことである。験とは、「しるし」という字は、明験と熟字する。四十度の高熱患者にペニシリンの注射を打つて、真に効があらわれて翌日はけろりと平熱になつていたなら、明験「あきらかなしるし」が出たのである。

そこで、審験とは、明了無疑決着したこと、他力の大信心は、事実以上の事実、極重悪人が仏智を信ずるがゆえに、一念のたちどころに千古の疑團を氷解して、正定聚不退の人となり、妙好人となる。

次に「宣忠」とは、宣とは、のぶと訓ずる字であるが、字書には、徧也とあつて、ゆきわたることである。そこで宣伝とか、宣言とかいう語が使われるが、広く説き述べて天下にゆきわたらせることである。忠とは、元来「まごころ」とか「まごころをつくす」という字で、直也ともある。真心を尽くすということ、中と心を合わせて忠の字としてその義を示したものである。信はまごころ、中心のまごころである。論語には、「有忠信如丘者（忠信丘の如き者有り）」とあり、信とは忠である。心のどん底からのまごころである。正法が耳までは入るが心の底に徹しないならば、忠信のまごころでない。真心徹到と心のどん底にとどききつて、やがてそれが身口の上に顕われてきて、内外一致の信である。

そこで宣忠といえ、一切の時処に徧徧して変易なきまごころということである。徧徧広大なる真理そのままを頂いた信だからである。自力邪見では忠ではなく、迷妄邪偽では宣ではない。正法は客観的に真理（宣）であり、主観的には誠（忠）である。忠が口業に出れば宣であり、宣が中心に入れば忠である。だから内外調和、道綽のいわゆる、

「この心広大にして法界に徧徧し、この心長遠にして未来際を尽くし、この心あまねく備さに二乗の障を離る。もし能く一たび発心すれば、無始生死の有輪を傾く。」

と説かれるゆえんである。

かくのごとき徧徧のまごころであるから、審験とて、ものが明らかになつて疑いのない心ということができ、道理至極と信用尊重するということも出て来るのである。

### 欲願愛悦

次に信樂は「欲願愛悦之心」といわれる。欲願とは、共に信樂の樂の訓であつて、樂とは欲であり願である。論註には「願とはこれ欲樂の義なり」とあるから、この三字は同一の訓を持つ文字である。すなわち願ということである。この欲願はもと仏の欲願、一切衆生を生死流転より救つて安樂大清淨処におかんとするところの金剛決定の大欲願である。すなわち、欲生我国の欲である。衆生迷妄の小欲ではない。その仏の欲願が衆生心中に入つて「愛悦」となるのである。すなわち大經の四十八願の前には、「なんじ今説くべし。宣しく知るべし、これ時なり。いっさいの大衆を發起悦可せしめん。」とあり、如来の本願を聞き開いて、一切衆生は悦びを得、決定心を得るのである。愛悦といわれるのがそれである。愛は愛樂であつて、われらは御法を聞くほどの満足を外に見いだすことはできない。いわゆる、法味愛樂である。それは如来清淨真實なる欲願が衆生の信樂となつたからである。

### 歡喜賀慶

最後に信樂について「歡喜賀慶之心」といわれる。これはまず本願成就文に、聞其名号信心歡喜とあるに依られたものである。歡喜について証文には「歡喜というは、歡は身をよろこばしむるなり、喜は心によろこばしむるなり。」とあつて、身によろこぶと、心によろこぶと、歡喜の二字についての釈である。

次に、歡喜と慶喜との違いは、『一多証文』に、「歡喜はうべきことをえてんずと先だちて、かねてよろこぶ心なり。」また「慶はうべきことをえて後によろこぶ意なり。」とあり、『唯信鈔文意』にも、「この信心をうるを慶喜という。慶喜する人は諸仏にひとしき人と名づく、慶はうべきことをえて後によろこぶころなり。信心をえて後によろこぶなり。喜はこころの内につねによろこぶころたえずして憶念つねなるなり。」とある。

だから信心は一面は慶喜であり、一面は歡喜である。得べきものを得終つて、よろこぶ慶喜と、これから無限の未来をはらんでの、得るであろう喜びとである。すなわち、正定聚と滅度との二益である。煩惱のよころびは、そうは行かない。歡喜であつても、慶喜でない。慶喜であつても歡喜でない。つまり末通つた現前のよろこびでない。時に「慶喜する人は諸仏にひとしき人と名づく。」ということは、どこから思いつかれたかということについて、善導の觀念法門に、「ただ弥陀の願にかなうのみにあらず、またすなわち諸仏あまねく同じく慶びたまう。」とあり、十七願の意であろう。

十方称讚之誠言と教卷にはあつて、今もこの十八願の信心歡喜は十方称讚の喜び、諸仏の普皆同慶のよろこびである。故に信卷末には「廣大難思之慶心」といわれるのであろう。誠に行者の上には、煩惱の雲間よりほのかに顯れる喜びでも十方同慶の廣大難思之慶心である。

賀の字も「よろこび」という訓ではあるが、祝賀とつづる字で「いわう」という字である。文字の構成が、貝と加と合わせてある。加は音符で貝とは「たから」という字、昔は貝を貨幣として使つたからである。そこで賀という字は礼物をおくつて慶することをあらわすのである。つまり、ものを贈つて祝うのである。念仏は誠

にいわいである。今、信樂を積するに、多くのよろこびという字を集めて歡喜賀慶之心といわれるのである。

#### 疑蓋無雜の心

以上を結んで「故疑蓋無雜也（故に疑蓋雜ること無きなり）」といわれる。すなわち信樂は、眞実誠滿之心であり、極成用重之心であり、審驗宣忠之心であり、欲願愛悅之心であり、歡喜賀慶之心なるが故に、疑いの微塵も雜まじわらない信心、他力廻向の純粹清淨なる信心であると結ばれるのである。

上の至心積にも同じく、「……なるがゆえに疑蓋雜わることなし」とあつた。これは誠に大事なことで字訓釈をせられるのも、つまりは、三を合して無疑の一心を出したいからである。

#### 願樂覚知

欲生について、まず初めに願樂覚知之心といわれる。願樂とは、どちらも「ねがい」という文字であるが、どんな願いであるかというのと、浄土に往生したいというねがいである。そうすると行者のおぼつかないねがい、要請であるかというところではない。これはもともと如来の願樂である。如来の願心である。如来金剛の欲願である。念仏の衆生をして必ず、彼岸に往生せしめねばおかぬとの如来の金剛の願樂である。その如来の願樂が行者の上にとどいて、行者の願樂となつたのである。たとえば、強力な親磁石の近所に軟鉄を持って行けば、鉄は親磁石にひきつけられる。これは鉄が子磁石になつて、親磁石にひきつけられるのであつて、子磁石が親磁石をしたう前に親磁石の力が、子磁石を生み、そしてそれを動かしているのである。

今も、行者が彼岸に向かつて生きぬきたいとの願樂をおこしたのは、そのまま親の金剛の大願に動かされているのである。したがつて、単なる不確実な願いではなくて、決定往生の確信のままの願樂である。たとえば、川の水は海に出たいと願っているが、それは単なる希望ではなくて、決定して海に入るのである。そのことを示した文字が次の「覚知」の二字である。この覚知は「必得覚知」である。必ず往生することを得と覚知しているのである。善導大師のいわゆる「心ず決定して眞実心の中に廻向したまえる願を須もちいて得生の想を作せ、この心深く信ぜること金剛のごとくなるによりて……」これである。

如来本願について明了に覚知して生ずる願樂である。ゆえに、そこには、心ず願樂とともに無疑の決定があるのである。

#### 成作為興

次に欲生を成作為興之心と積せられる。この四文字はみな生という文字の訓または義訓である。成作とは、仏道を成じ、仏事を作すで、仏道を成じ仏事を作すことは、皆これ大悲廻向によるのである。そこでこの成作は如来の修成であつて、如来

の修得顕現の由れをいう、次に為興とはその法体の修得顕現が、この生死界に縁起して出るありさまを為興というのである。

下の欲生釈には、欲生とは廻向心なりとあるが、今もそのことであつて、成作為興とは、大悲廻向の相である。衆生界に仏事を成し、仏道を成ずるまが大悲廻向である。この大悲廻向の心を、欲生の文字の上に見いだしたまうのである。

### 疑蓋無雜

「大悲廻向之心なるが故に、疑蓋雜わること無し」といわれるのが、欲生の心の結びである。誠にわが国に生まれんと欲えとの勅命は、そのまま大悲廻向の心である。大悲の招喚以外に廻向はないのである。この招喚によりて願生淨土するまが、大悲廻向なのである。大悲廻向の心であるから疑蓋は雜わらないのである。

かくして、至心も、信樂も、欲生も、本願の三心は皆同じく疑蓋無雜の心であると決せられたのである。

### 三心即一の言葉

「今三心の字訓を按ずるに、真実の心にして虚仮雜わることなし。正直の心にして邪偽雜わることなし。真に知んぬ。疑蓋間雜無きが故に、是を信樂と名く。信樂は即是一心なり。一心は即是れ真実信心なり。このゆえに論主建はじめに一心と言えるなり知るべし。」

以上の御文は三心の字訓釈の結成であつて、聖人が三心について三十三訓を出し、それによつて熟語を造つて八個の会訓を出されたのも、ついにこの結論に至らんがためであつた。すなわち初めに、如来は本願に至心信樂欲生の三心を誓われたのに、何をもつて天親論主は一心といわれたかの問いを發し、次に答えて、愚鈍の衆生をして解了し易からしめんがために、弥陀如来三心を發したまうといえども、涅槃の真因はただ信心をもつてす、このゆえに論主三を合して一とせるか、と略答せられて字訓を出されたのであつた。よつて結論づけるにあつて、

「今三心の字訓を按ずるに」

と、上来のすべてを受けてこられたのである。「真実の心にして虚仮雜わることなし。正直の心にして邪偽雜わることなし。」至心も信樂も欲生も、皆「真実の心」であり、「正直の心」である。凡夫有漏の心、不実の心ではない。また凡夫顛倒の邪心でもない。ただこれ、仏の真実心であり、正直の心である。真実であるから虚仮は雜わらない。正直であるから、邪偽はない。ただこれ如来真真正直の心である。

「真に知んぬ。疑蓋間雜なきが故に、是を信樂と名づく。」

三心の字訓、皆、真実にして正直の心たることを表わす、よつて三心皆疑蓋無雜の心であるがゆえに「これを信樂と名づく」と結ばれる。聖人は、これが出したのである。すなわち三心を信樂一つに収められたのは、三心即一の機受を顕して、これを信樂と名づくと言われたのである。本願三心機受一心の時は、いつでも三心は信樂一つにおさまる。この信樂が如来廻向のものであるが故に、真実の心であり、正直の心である。凡夫には本来、真実も正直もあつたものではない。自力疑心は虚

仮であり、邪偽である。この虚仮不実顛倒邪偽の凡情の中に、真実にして正直なる信樂は廻向されるのである。

次に古来の釈の中には、真実の心とは至心であり、正直の心とは欲生である。すなわち至心は、如来真実功德の名号を信ずるがゆえに、凡夫の虚仮雜毒のまじわるはずなし、後の正直の心とは、欲生心を顕す、如来の招喚に順じて正直に進んで決して別解別行などを聞き入れぬ、故に邪偽雜わることなし。この至心欲生の法を挙げて信樂を顕すが故に、「真に知んぬ。疑蓋間雜無きが故に、これを信樂と名づく。」といわれたのであるとする。

一体、本願の三心はあくまで三即一であるが故に、至心といえは信樂欲生を具し、欲生といえは至心信樂を具し、信樂といえは至心欲生を都べているのである。そこで信別意一といつて、言の別からいえは、至心の体、信樂の相、欲生の用と三心に別名があるのである。しかしその意からいえは一であるのを意一というのである。

そのことをよくのみこんでから、言別に立つていえは、各々その随一を守るのである。しかもその意一はどこへ持つて行つてもいいのである。例えば、『略文類』には、実義釈の終りに、

「三心皆これ大悲廻向心なるがゆえに、清淨真実にして疑蓋雜わること無し。故に一心なり。」とあり。これを今の信卷の文と対比すれば、「故に一心なり」は、今と同じく信樂の一心を示されたのであるけれども、三心皆これ大悲廻向なるが故とは、欲生に都べられたのであり、また清淨真実とは、三心皆清淨真実で、これを至心に都べられたのである。しかも最後に疑蓋無雜故一心也と信樂一つにおさめられたのである。

今も、真実の心といえは、『略文類』の清淨真実で、至心に当たる。また正直の心といえは、廻向心に当たる。大悲廻向心というのも欲生心、正直の心というのも欲生心に当たるといふのは、仏に約せば、欲生は大悲廻向心であり、行者の機受に約していえは、正直の心である。故に、略文類は大悲廻向心と仏の廻施に約していい、今、正直の心といわれたのは、行者が如来の招喚のまんま、正直に信順して別解別行悪見人等の妨げを聞かない機受に約していわれたのである。

かくて、本願の信樂は、行者自力の發起するところではなく、深く如来至心の清淨真実、如来廻向の正直の心に根拠するところの信樂である。ゆえに、虚仮無雜、邪偽無雜の真実清淨の大信心である。「信樂は即ち是れ一心なり。」機受につけば誠に一心である。本願三心機受一心、すなわち信樂である。

「一心はすなわち真実信心なり。」これは信樂を一心、一心を真実信心とご転釈である。真実信心という言は善導の礼讚に出る。これはもと、大経の本願成就文に、信心歡喜乃至一念と出る。それによつて、論主は一心といわれ、さらにこの論主の一心を真実信心という。信樂というは、真実信心の一心であると示し、「是の故に論主はじめに一心と言えるなり。知るべし。」この文は『論註』の讚嘆門の釈文である。今はそれを用いて結釈せられる。

以上のように、合三為一の趣あり、ゆえに論主は、願生偈の建章に、世尊我一心と告白されたのである。三心即一心の義趣「応知（知るべし）」といわれるのである。